



Title	都市における野生動物問題の環境社会学的解決に向けて：札幌市郊外のヒグマ出没問題における住民参加を事例に
Author(s)	伊藤, 泰幹
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第16979号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16979
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99823
Type	doctoral thesis
File Information	Taiki_Ito_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 伊 藤 泰 幹

学位論文題名

都市における野生動物問題の環境社会学的解決に向けて—札幌市郊外のヒグマ出没問題における住民参加を事例に—

本論文の観点と方法

本論文は、都市における野生動物問題について環境社会学的な観点から多角的に分析し、その解決へ向けた方策を、とくに住民の「参加」の問題を中心に論じたものである。

本論文は、札幌市のヒグマの出没問題について、それがどう理解され、「問題」に発展するのかについて、とくに住民・市民の視点から明らかにし、さらに、その解決にむけて住民・市民がどのように「参加」するのが望ましいかを論じている。特に市街地とヒグマが生息する山林の間となる「緩衝帯」で活動する人びと（家庭菜園耕作者、果樹伐採ボランティア参加者、山林に隣接する住宅街に居住する住民）について参与観察・聞き取り調査を繰り返して行う中からその問いに対する解答を探るという方法をとっている。家庭菜園耕作者に対しては長期にわたる参与観察やインタビュー調査、さらにはアンケート調査を組み合わせ果樹伐採ボランティア参加者に対しては参与観察とインタビュー調査を行い、山林に隣接する住宅街に居住する住民（ヒグマの出没が頻発する地区住民）に対しては申請者自らが住民ワークショップを企画した上で参与観察およびインタビュー調査を行った。そこから、「正しい知識」を普及することによる解決の困難を明らかにした上で、多様な価値や態度に寄りそいながら問題解決をすることが必要であることを、具体的かつ理論的に論じている。

本論文の内容

本論文は、計8章で構成されている。

研究背景を示す第1章では、まず、「獣害」を取り扱った先行研究を概観し、利害関係者が広範囲に及ぶという都市特有の問題があまり検討されてこなかったことを指摘した。本論文の分析の枠組みとしては、第1にヒグマの出没問題を「やっかいな問題」として捉えること、第2に対象者のナラティブに着目すること、第3に「アクションリサーチ」として調査者自身が研究対象者と共同で問題解決を考えることとした。そのうえで、札幌市のヒグマの出没問題を事例として、住民・市民の視点からヒグマの出没によって生じる「問題」とは何かを明らかにし、「問題」を解決するための住民・市民がどのように「参加」するのが望ましいかを明らかにすることを本論文の研究目的とした。

第2章では、これまでの北海道におけるヒグマ管理の経緯と札幌市におけるヒグマの出没問題を概観した。さらに、札幌市におけるヒグマ管理の経緯や、市民活動が展開してきた経緯を明らかにした。

第3章では、家庭菜園を営む人びと（耕作者）を対象として、ヒグマの出没がどう理解され、「問題」に発展しうるかを明らかにした。家庭菜園では、エゾシカや中型哺乳類による作物の被害に比べてヒグマの農作物被害の発生頻度は低く、多くの耕作者にとってヒグマによる農作物被害は問題と捉えられていなかった。むしろ、ヒグマの出没は、遭遇に対する不安として多くの耕作者が抱えている事案であった。しかし、こうした不安は、普段は顕在化しておらず、自らがヒグマと遭遇することに対して他人事のように扱われていた。また、ヒグマの出没に対する様々なナラティブが存在していた。こうしたナラティブから、ヒグマの存在が許容できない空間的な認識は

人によって異なること、行政の管理や愛護団体などの批判する対象がある場合にヒグマの出没が「問題」として語られることを明らかにした。

第4章では、耕作者がヒグマの誘引対策や獣害対策をどう認識しているかを明らかにした。まず、札幌市が行っている電気柵の貸出制度利用者への聞き取りから、その効果を認識していても電気柵の導入に必ずしも至らないこと、その理由として金銭的なコストや労力、高齢化などの社会的な背景が存在していることを明らかにした。同時に、耕作者が主体的に実施している多様な獣害対策も観察から明らかにした。それらから、ヒグマの出没調査時の札幌市職員と耕作者のコミュニケーションの必要性や、耕作者が主体的に行う獣害対策とヒグマの市街地出没を防ぐための対策を両立するための方策の必要性を論じた。さらに、両者が受容可能な「成解」を生み出すためのコミュニケーションの必要性や耕作者のナラティブに寄りそう支援の必要性を論じた。

第5章では、放棄果樹伐採ボランティアである「クマボラ」を対象として、活動が継続してきた要因を、参加者の動機と主催者の運営から分析した。ボランティア参加者の参加動機は、必ずしもヒグマの誘引防止への貢献だけにとどまらず、健康維持のためなど多様であった。また、参加者が継続して参加している要因には、会員制をとらない開放的な参加形態を目指すという主催者のポリシーも影響していた。さらに、ヒグマの専門家が入ることで円滑な活動が実施できていること、参加者同士がヒグマの出没問題の複雑性や自身の考えを話しあっていることなどが明らかにされた。果樹伐採は、多様な目的を有する参加者が参加するきっかけになりえ、そうした場を継続していくことでヒグマの出没に対する「公論形成の場」としての機能が生み出されていく可能性が見いだされた。

第6章では、山林と隣接する住宅街である円山西町町内会でのリスク・コミュニケーション活動を通して、住民にとっての「問題」とその解決方を検討した。ワークショップでは、住民が過去に出没した際の自身の行動や不安などを具体的な物語を伴いながら語っていること、また、出没経路や誘引物がありそうな場所を可視化していくワークを通して、参加者たちがヒグマが出没した「点」としての理解から生息地から侵入する経路などへの「面」としての理解へと転換することが見いだされた。また、ワークを通して身近な自然への価値観の共有や、専門家とのコミュニケーションがなされていた。こうしたワークの場では、専門家と住民間の問題意識の共有だけでなく、住民同士で価値観が共有されていることも明らかにされた。

第7章では、総合考察として、参加が求められている人びとのヒグマとの関わり合いの多様性や、「正しい知識」を普及することによる問題解決の困難さを述べたうえで、「ともに汗を流しながら」その場その場で受容可能な「それなりの解」である「成解」を生み出していくことが、人びとの望ましい「参加」のありようであることを議論した。さらに、そうした「参加」を進めるためには、多様なナラティブに寄りそうこと、小さなスケールから考えること、具体的なモノ・コトから考えること、意思決定を担う主体も一緒に参加することが重要であることを議論した。

第8章ではここまでの議論をまとめ、今後の研究の発展に関して述べた。